



# 12年前日記

---

2000年1月28日  
(金)

---

山田夫妻

---

『12年前日記 2000年1月28日(金)』

---

【2000年1月28日(金)】\*2012年1月28日(土)記

10時、生きている人間は誰しものが目を覚ますもの、ご他間に漏れず俺も起床で〜す。神様のくれた、要は昨日のあわてんぼうの俺様がくれた、思いがけないロスタイムを精一杯楽しむことにする。チェックアウトの時間ギリギリに部屋を出て、フロントに夜まで荷物だけ預かって貰おうかと思ったが、せっかくの晴れの門出に朝からそんなケチケチして、ケチがつくのもアレなので、一泊分追加で払う太っ腹(450B)。本当は今日の20時30分にはチェックアウトするのに！ まあ、今晚はバス泊ゆえ、ホテル代がいないから、まあいいかと算盤をちゃんと弾いたことだけご報告しておく。11時30分、ホテルを出て、いきなり、まさかまた今生で会えるとは思っていなかったマックで昼マック(100B)。一気にテンションまったり。バンコクの雑踏をボウッ〜と眺めながら、そういえば一ヶ月半もいるバンコクで、観光らしい観光はしていないので、バンコク慣れはしたが、せっかくのいい機会だしバンコク観光でもするかと思ったが、すぐさま己の職分を思い出し、戒める。俺は観光客みたいに遊びにきたんじゃねえ、仕事に来たんだ。それをちょっと思いがけない暇を自称プロ神様こと俺様から貰ったからといって、浮かれおって。一瞬たるんだ心をまたキリキリと触れれば切れるくらいにギュッと引き締める。そうそう仕事と言えばと、もうひとつの仕事も思い出す。14時、スカイトレインに乗って(25B)、6駅先のポアラン駅まで。例のライバル古本屋だ。敵情視察名目で店内を眺める。そして、おもむろに、あ、そういえばって感じでカウンターに行く。たまたま、ホント偶然だって、カバンに入っていた思い出がいっぱい詰まった古本を取り出して、売り飛ばす。たった80Bぼっち也。大事なのは金額の多寡ではない。少しでもこれから旅立つ体を身軽にし、旅費の足しになれば、それで十分でございます。全然足しにならないんですけどね。もう素直じゃないんだから、最初から売り飛ばすつもりで狸の皮算用して持ってきていたくせに〜、この仕事熱心仕事の鬼24時間仕事のことが頭から離れない〜。じゃあ、たまには息抜きと言う事で、敵情視察がてら目をつけていた古本5、6冊を、宵越しの銭どころかあの世に銭は持っていけないぜとばかりに、さっき稼いだばかりの80B分をたたきつけて買う。ある意味、古来から続く由緒正しき消費者不利の物々交換。旅費の足しを使ってしまったのは事実ゆえ、新たな旅費の足しになればと、目に付いた銀行でトラベラーズチェック100ドルを3610Bに。一連の行動はなんとなく、ちょっと温故知新。15時、スカイトレインに乗って(20B)、ついでに紀伊国屋に立ち寄り、新刊も買い込む(721B)。だって、きっとメソトに古本屋も新刊書店もないだろうから、それにバンコクに帰ってきたら新刊も売ればいいし。まあ、生きて帰ってくる気満々ですが、メソトから帰れないかもしれない。だからと言って、死ぬ前提でケチるより、きっと帰ってくるって前提で豪遊行動してまっせ。じゃあ、早く読んじゃわないと目に付いたダンキンに駆け込む(33B)。買ったばかりの古本を読みながら、ダンキンドーナツを決め込む。こういうのを嵐の前の静けさとかって言うんだらうなあ。古本だ新刊本だでただでさえ重いカメラバックが肩に食い込むので、体力温存を図り今日も歩かずスカイトレイン(15B)でホテルの最寄り

駅まで。17時、ホテルに戻り、昼寝もせずに、偉い、まじめにせつせとパッキング。がんばれ！19時、ホテルを出て、最後の晚餐に、ホテル近くにある東急の「田ごと」、そうそう例の店、にて日本食、とんかつ定食（140B）とビール（86B）で締めて（226B）。言いたかないけど、もち言うけど、こっちのとんかつはブタ臭い、8番ラーメンの方がマシだな、安いし。20時、ホテルに戻り、忘れ物がないか指差し確認して、部屋を出る。フロントでチェックアウトする旨を伝えると、「エッ、マジかよ、すごいぜ、この客、朝一泊料金を支払ったのにもうチェックアウトしちゃうのかよ」という顔を特にされず。チキショー、そんな元気な顔をみるためだけに払った銭なのに。安宿のくせにこんな真似する客がそんないるとも思えないが、まあコイツもプロのホテルマンのはしくれ、ポーカーフェイスで精一杯の見栄を張ったのだろう。もしかしたら餞別代わりに半額くらい返ってくるかなあと考えていたのだが、落胆した様子などは微塵もみせず、逆に目にモノ見せてやると、フロントの目の前の出口を出てすぐ、お誂え向きに止まっていたタクシーにこれみよがしに乗り込む（100B）。どうよとばかりにフロントを振り返るともう誰もいなかった。逃げやがったな、勝った。21時には、ちゃんとモーチット2に到着。水上マーケットやカンチャナブリの頃の俺とは違う。薄汚い屋台の売店で水だけ買い（10B）、バスだらけの広いバスターミナルから、見事お目当てのVIPバスの乗り場をようやく探し当てる。大きい荷物だけ、バスの中腹にあるトランクに詰め込み、車内に乗り込む。21時30分、冷房の行き届いた車内、王侯貴族みたいにゆったりし豪華な座席に腰掛け、裸の王様気分丸出しで、分厚いカーテンを閉めたり開けたりしていると定刻通り出発進行！ サヨナラ、バンコク、また会う日まで。再会できるといいね！ バンコク郊外に出ると空いている道をVIPバスはますます快調に飛ばす。心地よい振動に身を任せ、目をつぶる。チェンマイ帰りの頃とは自称プロとして格段の進歩した俺はすぐに眠りについた。何時か覚えていないが、ガヤガヤと車内にざわめきとドタバタと人が行き来する物音が満ち満ちた雰囲気、目を開ける。薄暗かった車内は煌々と明かりが点っている。一体何事だとカーテンを開けて、外の様子を伺う。どうやらサービスエリアに着いたらしい。クソいらねえサービスをとと思いながら、目が覚めてしまったので、仕方なく車内に出る。寝ぼけたまま、とりあえずトイレに向かう。超図られた！ 気付いたときには既に退くに退けぬ状態で、トイレの門番にサービスエリアのトイレ代3Bを取られる。忘れてた。あんまり悔しいからしたくもないウンコも捻り出して、トイレットペーパーを何メートルも使って、クソを拭きに拭いて、少しでも元を取る。サービスエリアで何か買い食いしようと思っていたが、むかつくので何も買ってやらないよ〜だ。置いていかれないように早めにバスに戻って待つ。これで辛勝か少なくとも引き分けだ、ざまあみろ、サービスエリアとグルのバス会社め！ さあ、ゆっくり寝るぞうと眠り込んでどのくらい経った頃合だろう、バスが急停車し、体がガクンと波打つ、鞭打ち目覚まし。クソボケ運ちゃん、居眠り運転でもしてやがったなと思い、また寝ようとする。バスの前の扉から物々しい格好をした警官か、さすがに軍人ではないか、が2人乗り込んできて、前の乗客から順にをひとりひとり叩き起こしながら、どうやら身分証明書を確認している。検問だ！ ピ〜ンときた。きっと狙いは俺だ。取材パスを出さなければスゴスゴと諦めると思っていたのに、あにはからんや、取材パスなしで正々堂々とVIPバスでメソトに乗り込んできた日本代表の国民的自称プロ戦場特派員を捕獲するためだ。カーテ

ンをそっと開けて外を見る。悲しい習性で窓の鍵は開けてあるが、窓から逃げるにはもう遅い。咄嗟に隠れる場所もない。完全に油断した。バンコクで平和ボケが過ぎたらしい。後はもう運を天に任せるしかない。いや諦めるには早すぎる。精一杯とぼけるしかない。まずは敵を知ることから。よくよく眺めてみると二人揃って、物々しい格好はしているが、特に片方は顔がたるみきっている。形ばかりおざなりに身分証明書と顔を見比べているだけ役人根性丸出しのお役所仕事。チャンスだ。二人組が俺に近づいてきた瞬間、先を制して最高の笑顔で間抜け面の方にパスポートを差し出す。案の定ヘラヘラ笑って、すぐにパスポートを返してくれる。問題がなかったようで、いや、俺という大問題が発覚しなかったゆえ、二人組はバスを降りた。勝った、危ないところだった。バスはまた何事もなかったように走り始めた。その後、2回も立て続けに検問があったが、以下同文って感じ。役人の末端同士がちゃんと連絡取ってないからこんなに検問があるのだろう。さては、俺を眠らせないつもりだな、睡眠不足に負けるかとウトウト（2012年の俺だ。12年前の俺は相変わらず飽きもせずスパイゴッコを楽しんでいるが、この3回もの検問は例の事件のせいだ。1999年10月のタイはバンコクのビルマ大使館を占拠した連中は最終的にタイ政府の用意したヘリコプターでメソト周辺のタイとビルマ国境のジャングルに消えた。そして例のラチャブリの病院占拠では全員射殺されたが、彼らの玄関口でもあるメソトに向かうバスや、メソトから出るバスにタイ当局が目を光らせるのは当然だろう。現場の末端までその危機感を共有しているかは当然、また別なお話だ。いやだ、マジメ！）。

○本日の出費、「計算するのが面倒臭いから、各々で適当にしといてよ」B。ついでに一日の流れも「いちいちうっとうしいから誰か簡単にまとめといて」ジャ〜。

『12年前日記 2000年1月28日（金）』

<http://p.booklog.jp/book/43319>

著者：山田夫妻

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadafusai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43319>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43319>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.